

今後整備する総合博物館の活用

(総合博物館の整備) 令和2年度(3定) コロナ臨時交付金

総合博物館本館1階→「炭鉄港」展示施設の整備とプラネタリウムの更新

① 「炭鉄港」展示施設の整備(日本遺産炭鉄港展示施設整備事業:1900万円)

昨年、「炭鉄港」が日本遺産に認定されたが、具体的な活動についてはまだ成果が出ていない状況にある。一方、総合博物館本館1階の鉄道展示はすでに25年が経過し、故障も多く、その全面的な更新を求める声が大きくなってきている。

今回、全体的な改修計画の一部を変更、先行した形で、「手宮駅構内ジオラマ」を活用した、小樽の炭鉄港遺産を発信するガイダンス機能を持たせる改修を行う。総合博物館所蔵の膨大な写真・動画資料を活用し、市内各地の鉄道遺産に誘導できるものとする。



既設の空が描かれている壁面を活用し、大型スクリーンとして利用する。



特定の展示模型を紹介する場合は、その場所のみをスポット的に照明を当てる。



当館収蔵資料を活用し、小樽の鉄道文化に関連する様々な写真を紹介

旧手宮鉄道施設など、炭鉄港や手宮駅構内に関する複数の映像コンテンツを上映する

② プラネタリウムの更新（プラネタリウム設備等整備事業：1500万円）

総合博物館プラネタリウムは、座席数 33 席で、常設としては後志唯一の施設である。市内はもとより後志地区各町村の児童・生徒の郊外研修に活用されている。コロナ拡散防止のためには、換気、座席間の距離が必要であるが、現状では、換気量的には 3 人。社会的距離の観点では 10 席のみとなり、現在は投影を休止している。

そこで、本事業により、換気施設を増設するとともに、投影装置を座席後方に設置、距離を保った座席配置となり、24 名で運用が可能となる。また、投影機器の移設に伴う更新により、より鮮明で、理科教育での利用が容易な操作ができるものとなる。

	整備前	整備後
配置図		
座席数	33 席（補助席追加で最大 37 席）	24 席（補助席追加再配置して最大 39 席）

③ 整備後の効果

第一に「日本遺産「炭鉄港」とはなにか」を市民、コロナ後の観光客にひろく理解してもらい、観覧後に市内各地の文化遺産などに回遊してもらう、というモデルの提示ができる。特に、教育旅行の児童・生徒の市内研修の振出としての活用が望まれる。また、集客の減少する冬期間の対策としても、更新後の展示は有効なコンテンツとなりえる。

プラネタリウムについては、学校の理科教育のための投影が拡充できる。これにより、市内の学校利用のみならず、後志地区の児童を含め、細やかな学習投影など、学校単元に合わせた対応が可能になり、利用の範囲が拡大する。札幌のような大規模なプラネタリウムではないが、小回りのきく、学芸員の生解説により、その時の天文ニュースに合わせた投影、しかも鮮明な星の投影ができるため、札幌近郊の利用者の取り込みも図りたい。なお、座席は移動が可能なので、コロナ終息後は椅子の増設により 1 学級の人数でも対応が可能な仕様を想定している。

20 年振りのリニューアルのニュース効果も見込めるため、公開予定の令和 3 年 4 月にはそれに合わせた事業を計画している。なお、炭鉄港ガイダンス展示、プラネタリウム投影機は、故障やメンテナンスが容易で、職員が対応可能なシステムになることを条件に仕様書を制作している。